

広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	西スラブ語の情緒構文：FSPとEASP（喚情態度的文構成）のダイナミズム
Author(s)	本城, 二郎
Citation	ニダバ, 27 : 10 - 19
Issue Date	1998-03-31
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00048024
Right	
Relation	



西スラブ語の情緒構文

— F S P と E A S P (喚情態度的文構成)
のダイナミズム —

本 城 二 郎

1. F S P (機能的文構成) と E A S P (喚情的文構成) の相互関係:

西スラブ語、すなわちソルブ語 (Sorb.)、チェコ語 (Cz.)、ポーランド語 (Pol.)、スロバキア語 (Slk.) は、他の東・南スラブ語にくらべ、いわゆる自由語順の特徴をよく表わしていることが知られている。そこでは、基本語順のバリエーションが文法機能の変更ではなく伝達機能つまり FSP 機能の変更を主に表示し、無標—有標語順の対立とは別のレベルにおける対立としての客観的—主観的語順が示差の特徴を形成するとされる。客観的語順 (T-R 語順) と主観的語順 (R-T 語順) の意味的対立は非喚情—喚情といういわゆるモダリティの対立という機能的側面を反映していると考えられる。

Cz. : Byl jednou jeden král. A Ten král měl dva syny.

(lit. there-was once a king. And the king had two sons.)

T ₁	R ₁	T ₂ (=R ₁)	R ₂
/客観的語順/	/非喚情的・話者と状況を考慮/	/心的過程に符合/	

Byl jednou jeden král. Dva syny měl ten král. A do světa se chtěli

(Two sons had the king. And to world REFL. wanted

podívat ti synové.

/主観的語順/	/喚情的・興奮の感情/	to-see the sons.)
---------	-------------	-------------------

これに対して、FSP 決定 3 要因の一つ FSP 線条性原則が Th(eme)-Rh(eme) を無標語順とし、Rh-Th を有標語順とする FSP 原則を喚情性原則とし、上記の客観的語順—主観的語順の対立を語順体系ではなく FSP 体系内の対立・補足関係として位置づけることも可能で、語順以外の手段による喚情性 (E A 性) 表示への道が開かれることになる。

F S P 線条性原則	喚情性原則
-------------	-------

Cz. Dostal pětku i ze čtení. I ze čtení pětku dostal.

(lit. he-got five even from reading.) + /話者の主語に対する否定的態度/

Th	Rh	Rh	T
----	----	----	---

2. 西スラブ語の構文の F S P と E A 性

以下に、西スラブ語の基本語順とその有標バリエーションおよび主観的語順の可能性を探

り、語順の喚情性について検証してみる。

2. 1. 客観的無T(テーマ)文*

2. 1. 1. 客観的無T(テーマ)文: 無標で存在・提示スケール(Ph-Ex/Pr)を示す

基本文型: (Ad/S_{pp}) - Vf - S_{nom} (注) 太字はIC要素を示す

全スラブ語に一般的な語順とされている。 *この場合“客観的”とは伝達

Cz. Pod mostem *śumi* řeka. の基礎を持つという意味

Slk. Medzi mnou a otcom *stál* stolik, uprostred stolika *stáli* šátočky.

Pol. W piecu *buzuje* ogień, trzaska drzewo. (注) 以下斜字体は動詞を示す

Sorb. Z woknom so z kěrchowa do stwicky běje křiže *swěiachu* ⇐ドイツ語的

代表例として、*být*(to be)が主語前位置で通常“存在”を表わす。

Cz. *Jsou* bílé vrány. ⇐ Vrány *jsou* bílé. /属性/

(there-are white crows.) (Crows are white.)

/存在/

Bílé vrány jsou /対照強調/

(there-are white crows (but not others.))

2. 1. 2. 客観的無T文のバリエーションI: 有標語順で存在・提示の意味的強調を示す

Vf - Ad/S_{pp} - S_{nom}

東・南スラブ語に特徴的であるが、西スラブ語ではPol.のみ若干観察される。

Pol. *Nigota/y* mi w myśli jakieś sposoby, ratunki, zapobieżenia.

2. 1. 3. 客観的無T文のバリエーションII: 文体的に有標で使用頻度が低い

S_{nom} - Vf - Ad/S_{pp} // Vf - S_{nom} - Ad/S_{pp}

S_{nom}の意味の文脈独立・非限定性より存在現象の意外性・驚き、他の現象に対する対照強調を表わす。Pol.とSorb.(有標存在文)で観察されている。バリエーション

Ad/S_{pp} - S_{nom} - Vf // S_{nom} - Ad/S_{pp} - Vfは、主観的語順とみなされる。

Pol. [Zabici lezeli nie opodal wozu, ...] *Bia/y* motyl, *zwyk/y* wiosenny kapustnik, *fruva/* ponad ich nieruchomymi twarzami.

Sorb. [Woda je čorna kaž čornid/o, ani njewidziš, hač so hiba. *M/y*n

mlěje, ale nihdie wóz, któryž by zorno do *m/y*na přiwjez/] *Mostik*

wjedze přez řeku.

この点で、文頭Vfに関し西スラブ語では可能だが特徴的ではないと見なされる。

2. 2. 客観的T文: 基本語順

2. 2. 1. 基本文型: S_{nom} - VF - O: スラブ語の無標語順

フィルバスの文脈独立意味スケールの属性スケール B - Q - Spに符合する。

Cz. *Děšť smazavá* stopy.

Na mistrovství světa ve Vídni *porazilo* Československo Finsko.

Pol. *Sęd musi powziąć* przekonanie.

ここでは、文脈独立文のホモニム解釈における主語位置の文法化、つまり自然語順としてのS - O語順の定着が観察される。一方、繫辞を含むバリエントは、属性(分類)文の基本語順: S_{...m} - be - Predicate

Cz. Petr *je* účastníkem zájezdu do Řecka.

T R

確認文の基本語順: Predicate - be - S_{...m}

Cz. Účastníkem zájezdu do Řecka *je* Petr.

T R

のように、それぞれが別の基本語順を形成している。そこで、次に基本語順とその無標語順バリエントの可能性を観察すると、i. 全スラブ語に一般的な場合と、ii. 一スラブ語特有の場合に分類されることがわかる。

i. 全スラブ語に一般的な場合:

Cz. Eva něco *povídala*.

T R ←西スラブ語における文末Vfと文中代名詞の傾向

Cz. "Jdeme do kina", *řekla* Eva a *začala se* oblékat. ←挿入文におけるVf-T主語の傾向

ii. 一スラブ語特有の場合:

Sorb. Wobswětłene woknješko mi puć *pokaza*. ←Sorb.における無標文末Vfの傾向

2. 2. 2. 客観的T文の有標語順バリエント

語順の有標性は、当該言語の主要語順原則よりの可能な逸脱の種類と程度により決められると考えられる。スラブ語では次の分類基準: ①動詞特に非レーマVfの位置 ②レーマVfの位置 ③文頭非レーマVfの機能負担 ④主観的語順、が一般的である。

①動詞特に非レーマVfの位置: 非レーマVfの文中位置の実現の傾向

文脈独立S_{...m}が存在する場合:

Cz. U zdi *hráli* čtyři malí otrhanci 'hlava - orel'.

T:Set R ←非レーマVfの文中位置(=Slk., Sorb.)

Slk. Z lešenia *vidí* murár trochu ďalej ako roľník od pluhu.

T:Set R ←非レーマVfの文中位置

Pol. Pod nim czterech małych obdartusów *grało* w orła i reszkę.

T:Set R ←レーマ主語のVf前位置(=他のスラブ語)

②レーマVfの位置:

2つのバリエント: S/Th - Vf - O/Th // S - Vf - Ad/Set

Cz., Slk. では可能であるが頻度が少ない:

Cz. *Žijeme* v době překotných událostí, kdy příliš často *zapomínáme* na to, co *bylo* včera, co však *nepřestalo existovat* s včerejškem.

Sorb. ではレーマVf文中位置はレーマ文末第2位置の傾向に符合する。

Sorb. Wona *je so jara rozhorli/a*. A strašnje *je pluwa/a* při řečenju.

Pol. は文中レーマVfを用いるが、Vfの後続要素のテーマ性は前方照応で示す。

③ 文頭非レーマVfの機能負担：

Vf - S - O (S - Vf - O のバリエーション)は古代スラブに特徴的とされるが、西スラブ語では頻度が少なく特徴的でない。Pol. は文頭Vfを用いるが、Cz., Slk. では物語文体でも希に文中Vfに置き換わる傾向がある。

Pol. *Zwracaj, tez uwagę z/ozone formy czasownikowe.*

Cz. [Venku mrzne, zato v teplotku se to kouzli], *to dělají* prsty triky samy.

④ 主観的語順：

R - T 語順で代表される主観的語順は、単なるイントネーションを伴うCD度の漸進的下降のみを表わすだけでなく、話者の伝達内容に対する態度 (A) が主観的、個人的、さらに喚情的 (E) であることも表示している。伝達内容はその際、なんらかの評価、例えば以外性、驚き、注意喚起などを受ける。

Cz. Jen snih a vítr *umějí* takhle *čarovat*.

R T

Sorb. Krasny raj *je* krajina pod Dubrawu!

R T(=Snom) ←S以外がR位置をとる為Snomは文末(文中)へ

非喚情的 R - T 語順は、頻度は高くないが、スラブ語全体では短い報道文の冒頭で用いられる。そこでは、文末IC非強調イントネーションの使用により、無標のCD基本配列しか出来なくなる。

Cz. Do prodejny Klenotů se *vloupal* neznámý pachatel včera v noci

T<R (Tr) R<R

na Žižkově. ←Včera v noci se *vloupal* neznámý pachatel do ~ na - .

R(+IC) T (Tr) R R(+IC)

/文字通りの元のCD配列/

T - R - T 語順つまり文中Rは、R - T 語順つまりR文頭語順に較べ喚情性が低い。その為、個人的な使用に適さない。

Cz. [Tato oblast zkoumání *zahrnuje* rozsáhlou problematiku od komparativního studia životních období přes studium intergeneračních vazeb až ke studiu morálního růstu a vývoje svědomí -] ostatně, kterýkoliv psychologický problém lze *uchopit* v této perspektivě.

T R T

Slk. Otec, *študovať* treba *dať* tohto nášho táraja, do dobrých škôl ho

T R

treba *poslať*.

T

西スラブ語では、この文中RはPol.,Slk.の方がCz.よりも典型的である。Sob.は文法原則から文中(文尾第2位置)Rは一般的である。

Pol. Za zabójstwo w afekcie Szymon najwyzej dziesięć lat *by dostał*...

T R T

Slk. Okrem staroby *worduje* ma drevená noha, ktorú *som* si z vojny *doniesol*.

T R T

Sorb. Porjadne wuswědćenje *chcu* ja *widzeć*, hdyž so *wróćimy*, *je* mje knjeni

R T T R

Hemplowa *namo/wi/a*.

T

3. 疑問文のFSPとEA性

3. 1. FSPに影響を与えるモダリティ(Modus)要因-ICによる場合:

語順以外に喚情性(EA性)を表示する手段としてIC(Intonation Center)付加およびモダリティの変更がある。前者は明示的な意味の差異を生み出す主体とは成りえず、それを修正するという点で、語順の機能に近く、後者とは大きく異なる。以下に、モダリティの変更に伴うIC付加の可能性について疑問文を検証する。

疑問文の2機能:

- i. 聞き手がある情報に不足していることを表明し、受け手にそれを満たしてくれるよう訴える。
 - ii. 聞き手が受け手に対して何を知りたがっているのか、どのようなパースペクティブから不足している情報に接近したいのかを、知らせる。
- iの機能はいわゆる疑問性(Interrogativity)を表示する手段、つまり疑問詞や定動詞(Vf)のモダリティ表示子(ME:Modal Exponent)、語順、それに話し言語ではイントネーションにより行なわれる。他方、iiの機能は疑問文を構成する要素の意味内容、それにパースペクティブはFSP要因の相互作用の結果である。

(Firbas(1992), pp.97-98)

疑問文のFSP分析においては、2つの視点つまり聞き手と受け手の視点が必要であるが、前者の個人的な視点は両者の共有情報や両者間に存在する先行文脈と状況文脈により決定されることより、①. 共有情報の視点と、②. 受け手の視点が関与的であると考えられる。その際、聞き手の発する疑問文中には少なくとも2種類のレーマ(フォーカス)を確認することができる。①に対応するレーマは聞き手が受け手にアピールするところから聞き手フォーカス(Foc)とよび、②に対応するレーマは受け手が疑問文中に発見するところから疑問フォーカス(Foc)とよぶ。聞き手Focは上記iに対応する手段、つまり疑問

詞、MEなどが担い、疑問Focは平叙文のそれと一致すると考えられる。

Slk. *Kedy si bol naposledy v kine?*

/when (you-) were last-time in cinema?/

聞き手Foc

疑問Foc

Slk. *Kedy si bol naposledy v kine?*

(注) 太字はIC要素を示す

聞き手Foc (+IC) > 聞き手Focの音的強調：一種の喚情態度 (EA) 性

/受け手に対するアピール/

文全体が未知情報を示す場合：

Cz. *Kde je tu stanice metra?*

Pol. *Czy pan lubi sztukę?*

疑問Focは、先行文脈の要素との対照、または聞き手により故意に強調される場合、IC (Intonation Center) 要素として示される。

Cz. *Včera jsem se vrátil z Brna. - A kdy pojedíš do Prahy?*

Pol. *Dlaczego właśnie tam?*

IC要素の文中位置については、以下のように一定してはいないが、非対照強調の場合、疑問FocはICを担う必要がなく、上記のように疑問詞がIC要素となる。

Cz. *Proč právě Eva má tyhle ty potíže?*

非対照強調の場合でもIC疑問Focへの強い傾向を示すのがCZ.であり、少ない程度にしかもyes-no疑問文においてはSlk., Pol.である。

Cz. *Kudy se dostanu na stanici metra? - Můžete nám sdělit nějaké podrobnosti?*

Slk. *Vieš nakresliť mapu?*

Pol. *Czy masz papierosy?*

このようなIC疑問Focの文中の位置は、通常文末または文中も可能であるが、定動詞 (Vf) にくる場合は文中も可能である。

Cz. *Kam jsem jen položil ty brýle? // Kam jsem jen položil ty brýle?*

A *vi* otec o vašem rozhodnutí?

A otec *vi* o vašem rozhodnutí?

A *vi* otec o vašem rozhodnutí?

以上まとめると、西スラブ語の疑問文ICの担い手は、(1)疑問Focか、(2)非疑問Foc疑問詞 (= 聞き手Foc) のみで、(3)それ以外 (前倚辞等) は不可となる。

3. 2. F S P に直接的影響を与えるモダリティ (Modus) 要因 - 疑問語位置の移動

一般的には、疑問語の位置は、その語の強勢の質により決定される。西スラブ語においては、後倚辞として用いられる語、例えばCz. *jestli, jestlipak*, それにPol. *czy*などは、yes-no疑問文で通常文頭におかれるが、残りの要素は倒置さ

文法/意味レベル Ad/Set Vf-V/Q S/B Ad/Sp Ad/FSp
 +QFOCA PNE=TME>QFOCA QFOC
 FSPレベル DTh TrPr-Tr ThPr Rh RhPr
 +TrPro

解釈: Kdy : +QFOCA ⇨ QFOC(=RhPr) Kdy :Set
 }疑問モダリティのマーカ→Rh性 }Tr(Pr)
 po(-jede):TME>QFOCA ⇨ QFOC(=RhPr) pojede: Q
 PNE ⇨ S/B>Th性

分析2:最後の例つまり疑問語自身が疑問フォーカスになる場合

Kdy pojede otec s Petrem do Londýně?
 Ad/Set Vf-V/Q
~~QFOCA=QFOC~~ PNE=TME>QFOCA
 DTh TrPr-Tr
 +TrPro=RhPr

解釈: *Kdy* : +QFOCA =QFOC(=RhPr) Kdy :Set
 ↑ }Tr(Pr)
 po(-jede):TME>QFOCA 疑問モダリティのマーカ→Rh性 pojede: Q
 PNE ⇨ S/B>Th性 //疑問内容の有義性/ ⇨ EA性

否定モダリティのFSP:

Cz. Otec nepojede s Petrem *do Londýně*.
 Otec nepojede do Londýně *s Petrem*.
 Nepojede s Petrem do Londýně *otec*.
 Otec s Petrem do Londýně *nepojede*.

分析1:最初の例の場合

Otec nepojede s Petrem *do Londýně*.
 vf-V/Q Ad/FSp
 PNE=TME>NegFOCA 否定モダリティのマーカ→Rh性 ⇨ NegFOC
 TrPr-Tr RhPr

解釈: ne(-pojede):TME>NegFOCA 否定モダリティのマーカ ⇨ NegFOC(=RhPr)

分析2:最後の例の場合つまり否定語自身が否定フォーカスになる場合

Otec s Petrem do Londýně *nepojede*.
 vf-V/Q
~~PNE=TME>NegFOCA~~ 否定モダリティのマーカ =NegFOC
 TrPr-Tr>RhPr

解釈: *ne(-pojede):TME>NegFOCA* 否定モダリティのマーカ =NegFOC(=RhPr) //否定の有義性/ ⇨ EA性

命令モダリティのFSP:

Cz. Pojeď(te/me) s Petrem *do Londýně!*

Pojeď(te/me) do Londýně *s Petrem!*

Do Londýně s Petrem pojeď(te/me)! // *Pojeď(te/me) s Petrem do Londýně!*

分析1: 最初の例の場合

Pojeď(te/me) s Petrem do Londýně!

vf-V/Q Ad/FSp

TME-PNE>CFoCA ⇨ CFoc 命令モダリティのマーカ ⇨ CFoc

TrPr-Tr RhPr

解釈: pojeď(te/me):TME>CFoCA 命令モダリティのマーカ ⇨ CFoc(=RhPr)

分析2: 最後の例のつまり定動詞の部分自身が命令フォーカスになる場合

Pojeď(te/me) s Petrem do Londýně!

vf-V/Q

~~TME-PNE>CFoCA 命令モダリティのマーカ =CFoc~~

TrPr-Tr>RhPr

解釈: *ojeď(te/me)*:TME>CFoCA 命令モダリティのマーカ =CFoc(=RhPr) ~~受動形, 疑問形, 否定形, 命令形~~ 主EA性

(注) 斜字体はフォーカス (Question-, Negation-, Command-Focus) つまり RhPr の要素を表わす。

太字体はIC(Intonation Center)を担う要素を表わす。

記号はFirbas(1992)に従っている。

Set(ting);B(eraer);Q(uality);Sp(ecification);FSp(Further Specification);TME(Temporal & Modal Exponent of the finite verb);PNE Person & Number Exponent of the finite verb);QFoc(Question Focus); QFocA(Question Focus Anticipator);NegFoc(Negation Focus);NegFocA (Negation Focus Anticipator);CFoc(Command Focus);CFoCA(Command Focus Anticipator);Th(Theme);DTh(Diatheme);Tr(Transition);TrPr (Transition Proper);Rh(Rheme);RhPr(Rheme Proper)=Foc(us);Ad(Adverb);v(Categorial Exponent of the finite verb or Auxiliary verb);V (Notional Content of the verb);S(ubject)

スラブ語においては、ICは通常以下の2つの条件の場合、疑問語または定動詞の部分に付加される。i. それらが Focを表わす場合と、ii. Focが他の要素で表わされる場合、である。

Rus. Kuda ty sobirajeshsya *vecherom?*

/where you go-you in-the-evening/

A *ty* kuda sobirajeshsya *vecherom.*

第1文は ICと疑問Focの一致が確認されていることから、無標の疑問詞疑問文と考えられる。しかし、それに後続する類似の疑問文においては、このICと疑問Focが一致せず、ICは他の語に、また疑問Focは疑問詞が担っていることより、いわゆる（疑問モダリティの担い手である疑問詞および定動詞ME要素が担う聞き手-受け手共有文脈より未知の情報を目指す）聞き手Focの音声的強化という現象がおこっている。これは一種のEA性表示と見なすことが可能である。

Kuda ty sobirajeshsya večerom?

聞き手Foc 聞き手Foc 疑問Foc

A ty kuda sobirajeshsya večerom. (注) 太字はIC要素を示す

疑問Foc 聞き手Foc...→聞き手Focの音声的強化...→聞き手の受け手に対す

/音声的強化によるEA性/ ら る欠如情報のアピール

このような現象は、Cz.以外のスラブ語に可能で、上記のRus.などの東スラブ語および一部Pol.やわずかではあるがSlk.にも散見される。この理由としては、Cz.のように文末ICにFocを一致させるといふほとんど文法化されたような文イントネーション形式を発達させた言語では、EA性は他のレベル、他の手段で表示されざるを得なくなったことより明らかである。この点で、スラブ語におけるCz.の特殊性は長い言語接触をもつ隣接言語であるドイツ語の影響による見なすことが可能であろう。ちなみに、両言語の疑問文のFSPはかなりパレルであることがFirbas(1976)*より明らかになったことは傍証と考えられる。

(注)*類型論的に異なる3言語のFSP-EASP分析はHonjo(1996)参照

参考文献:

Běličová, H. & L. Uhlířová (1996): *Slovanská věta*, Euroslavica, Praha.

Firbas, J. (1976): "A study on the functional sentence perspective of the English and Slavonic interrogative sentences", *BSE* 12, pp.9-56.

Firbas, J. (1992): *Functional sentence Perspective in Written and spoken communication*, Cambridge University Press, New York.

Honjo, J. (1996): 「チェコの言語事情: チェコ・日・英対照言語学について」("The Linguistic Situation in Czech Republic: A Contribution to the Contrastive Linguistics of Czech, Japanese and English") 大阪言語研究会第123回例会発表ハンドアウト.

Karlík, P. & A. Svoboda (1982): *Skladba češtiny pro cizince*, FF UJEP, Brno.

Mathesius, V. (1975): *Obsahový rozbor současné angličtiny na základě obecné lingvistického*, Praha.

Svoboda, A. (1989): *Kapitoly z funkční syntaxe*, SPN, Praha.

略号:

BSE: Brno Studies in English